

コア技術・技能の伝承を実現する技術・技能伝承コンサルティング

課題/背景 (技術・技能伝承の必要性)

- 今後5～10年間に熟練者の退職によってコア技術・技能が喪失するという事態に対し、多くの企業では技術・技能伝承に取り組んでいます。しかし、多くの企業で「熟練技能者のノウハウを効率よく伝承する」ことができない状況に瀕しています。

製造現場の実態

- ◇ 今後5～10年で熟練者が半減する
- ◇ 業務効率化により勉強する時間がとれない
- ◇ 伝承したくとも、伝承対象者である中堅技能者がいない（初心者にはレベルが高すぎる）
- ◇ 技術・技能伝承に対する現場の意識が低い（必要性の周知と動機付けの手段がない）
- ◇ 作業標準はあるが、安全面を重視した手順書的なもので、ノウハウの伝承には使えない
- ◇ 工場間で、人材（年齢）構成が異なり、画一的な取り組みは難しい
- ◇ 業務ノウハウなどの情報の共有化をしたい

技術・技能伝承の実態

- ◇ 作業の動画は撮ったが使われていない（編集や活用場面・目的を考慮していない）
- ◇ 伝承マニュアル作成は小集団や時間外の作業となり、人事的サポートがされていない
- ◇ 熟練者自身も何を伝えていいかわからない（ノウハウと気付いていない）
- ◇ 熟練者も仕事に追われ、後継者を育成する時間が取れない
- ◇ 技術・技能の抽出や整理に時間がかかり、技能伝承ノウハウまで整理できていない
- ◇ 合併などにより文書管理ルールが不統一

これらの課題を解決するために

企業実態（組織構造・業務内容・作業スキルなど）に合わせた伝承手法の確立が必要
 ◇ ノウハウを活用する場面ごとに必要な情報を洗い出し、「活用場面」と「必要な情報」を定義のうえ、蓄積する方法や内容を参照するための組織的・体系的な仕組み
 ◇ 「新人教育」「製造活動」「トラブル対応」など作業場面ごとに必要な関連情報が体系的・網羅的に検索・参照でき、将来の改善や創意工夫にも陳腐化しない仕組み

サービス概要 (技術・技能伝承サイクルと提供サービス)

- 技術・技能伝承は教材型（作業標準や手順書などにカンコツを盛り込む）とOJT型（マンツーマンで継承）に大別されるが、いずれも技術・技能伝承サイクルとして整理・体系化することが可能です。
- ノウハウの効率的な伝承には、現場で活用すべき「情報の見える化」と実施後の「経験の見える化」の枠組みを検討し、実効力のある伝承の仕組みを構築する必要がありますが、富士通総研ではそのための支援サービスを提供します。



